

第 1 回北海道開発の将来展望に関する有識者懇談会における主なご意見

論点 1 北海道の役割や将来像

【食料供給基地としての発展】

- ・我が国の食料自給率を維持・向上させる上で、北海道が中心的な役割を担うことは変わらないのではないか。
- ・自給率を維持・向上させる上で、米と畜産に課題がある。産業用の米を国産で確保することと、自給飼料を増やすことである。これについて北海道には大きな役割がある。
- ・北海道の農産物は他地域で加工されることが多く、付加価値が道外に逃げていく。それを引きつけるためには、ロジスティクスの改善、加工のさらなる高度化が必要。
- ・持続的な漁業を行っていく上で、生産から流通までの基盤や人づくりが重要である。
- ・農業や食のイノベーションを起こすための投資が求められている。
- ・オランダのフードバレーのように、全産業を挙げて横断的に取り組めないか。
- ・中国は将来食料輸入国となることが確実で、北海道産の食料が売れる時代が来る。

【北の優位性を活かした構想の展開】

- ・地政学的観点から北海道の強みは何か考える必要がある。中国から北米への輸送船のコンテナは、帰りは空である。このオペレーションセンターを北海道で展開してはどうか。
- ・備蓄基地としての北海道の役割を打ち出せないか。
- ・寒冷な気候を活かし、食料備蓄拠点や、高付加価値製品のストックポイントをつくっていく。そのことが東京との間の物流における片荷を解消し、物流コストの削減にもつながる。
- ・アジア・ヨーロッパ・アメリカを結びつける航空路を含めた国際交通網については、アジアの北に位置する北海道の優位性がある。北方圏構想の取組が今こそ重要ではないか。

【機能分散の受け皿としての役割】

- ・首都圏への一極集中はリスクであり、リスク分散を考える上では、遠隔性や広域分散や寒冷であるこれまで不利であった地域条件に優位性が生まれてくる。
- ・2050年までに首都直下型地震や東南海地震も起きるだろうと考えれば、北海道はバックアップ拠点到り成り得る。
- ・特に外資系企業においてリスク分散の動きが出ている。Facebook や Google による北欧へのデータセンターの立地が進んでおり、寒冷地であることは企業立地に優位である。

【エネルギーの活用】

- ・電力だけでなく、暖房エネルギー源としてエネルギーの地産地消を考える必要がある。
- ・最大の再生可能エネルギーは水力であり水力発電の能力をさらに高めることを考えるべき。

【地方型の発展モデル】

- ・縮小均衡論に落ち込むことなく、北海道でさえ明るい未来が開けるといふ未来志向の将来像を打ち出すのがこの懇談会の役割ではないか。
- ・成長や稼ぐためには何が必要なのか、北海道で新しい稼ぎ方のモデルとして何ができるのか問われている。
- ・イタリアではアグリツーリズモなどの取組により田舎で経済循環がうまくいっており、北海道でも、「わが村は美しく運動」などに知見を取り込んでいく必要がある。

【その他】

- ・これまでの7期にわたる北海道開発の役割、成果は何だったのかを整理することにより見えてくるものがあるのではないか。

論点2 北海道の強みの活かし方、弱みの克服方法

【広域分散型社会】

- ・ITSなど交通に関するイノベーションが期待されるため、広域分散であることは必ずしも弱みではない。災害で全体がやられることがないという利点がある。
- ・自立した地域が分散している状態が、災害に対するレジリエンスの観点から理想像となる。

【積雪寒冷地】

- ・雪かき道場には都会から多くの参加者がいる。特別豪雪地帯は日本の中では少なく、むしろ多くの人が雪国に憧れている。外の視点から見る必要がある。
- ・高品質製品の貯蔵など、冷却することを必要とする産業がある。
- ・人は基本的に移動する生き物であり、いかに人を安全に移動させるのかが重要。技術も進歩するが、冬の移動はまだ当分困難なままであろう。冬の交通対策を真剣に考えるべきであり、そうでなければ地域のマイナスイメージが払拭できず、移住者も増えない。

【物流】

- ・物流は北海道の最大のネックであり、HOPのような取組の一層の強化が必要である。
- ・水産資源や漁場の変化により、水揚げの場所が変わっても、加工場は簡単に移転できないため、水揚げした水産物を道内で輸送することが必要になる。海と陸の物流ネットワークの構築が重要である。

【国際化】

- ・北海道は国際化が遅れている。大学に留学生を呼び込もうとしているが、外国人受け入れにもものすごい事務手続きが必要になる。新千歳空港までに成田空港で乗り継がなければならないというのもネックであり、トータルに国際化を考えていく必要がある。

【全国より進行する人口減少・高齢化】

- ・高齢化が10年先に進んでいるということ、10年先には抜け出せると捉えた方がよい。
- ・出生率が1.26と低いのは北海道の弱みである。全国に先駆けて北海道がまずはV字回復することが必要ではないか。
- ・女性・若い人・高齢者の活用が重要でないか。
- ・地域おこし協力隊の定着率は高いという。
- ・農業では、厳しい作業環境を嫌がって、雇用したくても人が来ないという問題が生じている。このため、徹底した省力化を図っていかなければならない。

【まちづくり・土地利用】

- ・農業の大規模化で農家が少なくなるためコミュニティが守れなくなることが危惧される。
- ・都市がコンパクトシティとなったとき、残された農村はどうなるのか考えていく必要がある。
- ・どんなに支援を手厚くしても、人が住まない集落が出てくるだろう。国土の保全や環境の管理について議論していかないといけない。

【ゆとり、景観、ブランド力】

- ・地域ブランドとしての北海道はダントツ1位である。広大な大地、美しい景観、冷涼な気候等、これらを経済力に結びつけるための知恵が今求められているのではないか。
- ・日本国民は心のゆたかさを求めており、北海道では心のゆたかな暮らしができる。
- ・北海道の住みやすさを強みにするためには、雇用の場があることが重要である。
- ・北海道の景観は人材も惹きつけている。商社マンが景観に惹かれて移り住み、3年後に町長になった。美しい景観を守っていくことが必要である。
- ・北海道開発に関心を持つ留学生が増加傾向にある。情報発信の工夫によって、国内他地域とは違った魅力をPRできるのではないか。

【人づくり】

- ・北海道に関する身近なことについての知識が浸透していない現状があり、学生の教育が必要である。
- ・地域づくりに小さな子供も巻き込んでいくことが必要である。
- ・シーニックバイウェイやマリナビジョンの推進は、地域づくりや人づくりに大きく貢献している。こうしたことが、地域の産業にも活力をもたらすのではないか。
- ・地元のために同じ方向を向くということは難しい時代と言えるかもしれない。人づくりや連携・協働について議論してもいいのではないか。

その他

【開発計画の役割、計画推進手法】

- ・計画を考えるうえで、現場のリアリティやスピード感をどんどん取り込んで実施していくという観点が必要である。
- ・これまでの計画には肝心なものが抜けていた。誰が行い、誰のためにサービスを展開するのかというようなマネジメントの部分が計画されていなかった。持続的な組織体制が必要であるが、これには民間企業が入らないといけない。
- ・実際に民の力が動き出すためには、ここでの議論をどう民間企業や道民に伝えていくのか考えていく必要がある。

- ・世界経済を引っ張る成長センターとなるような都市については民間が主導すればよいのかもしれないが、それ以外について計画していく必要がある。
- ・同じ区域に国の機関と道県が存在する北海道と沖縄は行政システムも特徴的であるが、この経験がモデルとなるのではないか。
- ・高齢化するインフラ対策についても、地方では技術職員が少ないという現状を踏まえ、北海道から新しいモデルができれば良い。

- ・基盤整備については個別にばらばらに行うのではなく、地域において柔軟に実行できることが必要である。